

Title	訃報
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.4 (1982. 3) ,p.123(547)- 124(548)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙 計 報

## 報

前委員森馨氏には、昭和五六年九月十九日に逝去せられました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

また、前会長今宮新氏（慶應義塾大）には、昭和五七年一月二八日に逝去せられました。心より御冥福をお祈り申し上げます。尚、葬儀に際し、本会により次の弔辞を御靈前に捧げました。

### 弔辭

今宮先生 長年にわたり御指導賜り誠に有難う御ざいました。

先生は、大正十二年慶應義塾大学文学部史学科を御卒業、直ちに母校に奉職されてより、五十五年にわたり教壇に立たれ、その温厚は人格と、高邁な識見とを以て、多くの子弟を教育されてこられました。

先生の義塾における五十五年は、これを三つの時期に分けることが出来ると思います。まず終戦に至るまでの二十五年間は、学究者として活躍された時期であります。昭和六年義塾留学生としてドイツに赴かれ、帰朝後は大化革新の諸改革のうち最も重大な意義を有する班田收授制の研究に没頭され、土地公有主義学説を打ち樹てられ、三田の史学の声価を高からしめられ、昭和二十六年には、『班田收授制の研究』により、文学博士の学位を得られました。学究の時期であります。

つぎに、戦災の大打撃を受けた義塾は、戦後の復興のために、先生の書斎に留ることを許さず、学校行政の要職に先生を引出しましたのであります。昭和二十一年、商工学校長、引続いて中等部新設の難事業に精魂を傾けられ、初代中等部長として三十一年四月に及びました。つづいて三十七年七月から定年退職される四十四年まで、塾史編纂所長として、『慶應義塾百年史』の完成に尽力され、その間文学部長、文学科研究委員長、日本歴史学協会委員長の要職を兼務され、四十二年には三田史学会々長をも歴任されました。学校行政の時期であります。

四十四年、定年制により一応教授を辞されましたが、名譽教授として五十二年迄大学院の授業を担当された先生は、再び学究にその若き情熱を燃され、ドイツ留学時に採収された日独関係の新資料の精細な研究をまとめられ、『初期日独通交史の研究』として公刊され、学界に貴重な研究を提供されました。

晩年先生は健康を害され、好きなお酒もやめられましたが、学問に対する情熱はいささかも変らず、最後まで枕頭に書物を置かれたと聞いて居ります。

学問を愛し、義塾を愛した偉大な恩師を失ったことは、大きな悲しみであります。先生に教を受けた我々としては、心より先生の御冥福を御祈りすると共に、永く先生の御教へを心に懷いて、門弟後輩が力を合わせて努力することを御誓して、弔詞といたします。

今宮先生誠に有難う御ざいました。

昭和五十七年一月三十日

慶應義塾大学三田史学会長

河北 展生

### 江坂輝弥君学位請求論文審査要旨

#### 『縄文土器文化研究序説』

本論文は著者の四十余年に及ぶ、わが国先史時代の“縄文土文化研究”に関する成果をまとめ、初めて体系的に世に問うたものである。縄文土器文化の研究は一八七七年にアメリカ人エドワード・シルベスター・モースが大森貝塚の発掘を行ったのを端緒とし、多くの優れた先駆たちによって進められてきたが、一九三〇年代に入つてから急激に近代科学としての地位を確立し、驚くべき進歩をとげた。著者はこの好機にめぐりあい、幾多の優れた先輩の指導を受けながら、専門家としての道を歩みつゝけてきた。

この科学は特にさきの大戦の終るのをまつて、急激な進歩をとげたが、著者は常にその先端に立ち、足跡を全国にあまねくしたばかりでなく、韓国の古代文化にも特に深い造詣を持つている。また古くから龐大な量に上る報告、論文を公表してきたことも特筆されるべきであるが、本書は中でも特に主要な三一篇を選び、体系的に集成を試み、その成果を世に問うたものである。

さて縄文土器文化については前述した通り、百年を越える研究の蓄積があるが、考古学研究の特性として、十分な理解と精緻な鑑識眼が必要とされ、あらゆる近代科学を駆使することが要求される。著者は年少の頃からこの点に着目して、地理学、地質学、

をはじめとして、動物学、植物学、鉱物学など広く自然科学を修めた結果、一頭地を抜く新境地を開き得たのであった。とくに幼時から遺跡、遺物に親しみ、すぐれた鑑識眼を体得し、多くの先駆から教えを受けるために努力したこと、特筆に値するであろう。本論文はそれを証して余りがある。

さて本書の内容について検討を加えると、第一章は著者の研究の核心をなすものというべく、縄文土器の誕生から終末までの長い歴史を全国に亘って精査し、数千年に及ぶ間に作られた土器をそれぞれの製作技法、形態、装飾の各方面から詳細に吟味し、地域型式、時期型式に細別し、時期型式の年代序列を発掘層序、形式推移観などを通じて確立し、同時に全国的に特定形式の分布を追跡した。このような操作は他の研究者も試みているが、数次に亘る改訂を重ね独自の編年表を作製した。それとともに特に縄文土器の発達の基盤をなす所謂縄文時代早期の土器に主力を注ぎ、その遡り得る極限を探つて、今日の段階では決定的とも云える結論に到達している。その研究過程を示したものが、第一章の一三篇の論考であり、第一篇の一九四二年から、第一二二篇の今日に至る四十年に及ぶ嘗々たる軌跡を明らかにしている。

さらに我国の各地域において遡り得る最も古い土器型式をもつて縄文土器の起源を考え、その型式の依つて来るところを国外に摸索し、さらにその特色が劃一的なものではないことを指摘して、それぞれの出自がシベリヤ沿海州、或いは華中からインドシナに求められるなど、一元一系的なものではないことに着目し、縄文土器の多元論を展開したのである。このことは、それぞれの